

旧制の高等学校は、1894(明治27)年の高等学校令によって高等中学校の後身として設置された、帝国大学の予科(予備教育課程)に相当する高等教育機関である。「男子の高等普通教育を完成する」ことが目的とされた。1921(大正10)年より文科と理科のそれぞれについて第一外国語別のクラス編成がなされ、文科甲類(英語)・乙類(ドイツ語)・丙類(フランス語)、理科甲類・乙類・丙類が設けられた。旧制高等学校には官立・公立・私立のものがあり、最終的に35校を数えた。また、中学校修了後に進学する3年制のもの、尋常小学校修了後に進学できる中等教育課程を含む7年制のものがあった。女子の入学は戦後の1947(昭和22)年まで認められなかった。そして戦後の学制改革によって旧制高等学校は新制大学に統合され、1950(昭和25)年に閉校した。

高等学校から帝国大学に進むのが近代日本における高等教育の正統的ルートであり、高等学校には国の指導的人材の育成が期待されていた。したがって入学者選抜試験の倍率は高く、入学者は同学年男子の1%未満にとどまり、ホワイトカラーなどの新中間層の子弟が中心だった。生徒の間では、専門的な知識の修得よりも、自分の人格を高めるために教養を身につけることが重視され、人文・社会科学書や総合雑誌を読むことを当然視する気風が形成された。学生寮に入る生徒が多く、寮では生徒による自治が行われたが、そこでの集団生活が旧制高等学校特有の文化の基盤となった。運動部の活動も活発で、学校間の対抗戦が定期的に行われた。

旧制高等学校の中でもっとも高い威信をもっていたのが、丸山眞男と加藤周一が学んだ第一高等学校(通称「一高」)である。丸山が在学していた時期までは東京府東京市本郷区向ヶ

第4部 高等学校時代

丘（別名「向陵」、現在の東京大学弥生キャンパス）にあったが、加藤が入学する前の1935(昭和10)年に東京帝国大学農学部と敷地を交換し、東京市目黒区駒場町（現在の東京大学駒場Iキャンパス）に移転した。東京大学教養学部の前身の一つ。